

ぶりきの缶が守る命

～カセットボンベの素材と防災力～

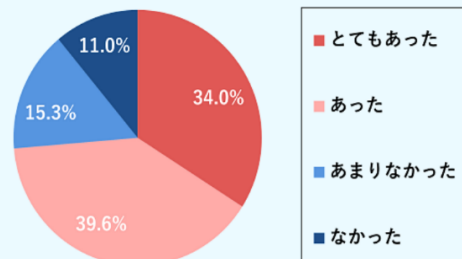
周囲を海にかこまれ、国土の3分の2を森林が占める日本列島は、山地と深い谷や勾配の急な河川など、美しい自然に恵まれています。この豊かな自然は反面で、たびたび私たちを苦しめる自然災害と隣りあわせとも言えます。

ひとたび地震や津波などの大規模災害に襲われると、水や電気、ガスなど生きていくために必要なライフラインが奪われ、たちまち当たり前の暮らしが出来なくなってしまいます。そして災害はいつなにか起きるかわかりません。

約三年前にタイガー魔法瓶(株)さんが20代から60代の男女「寒い時期の避難経験あり」と「なし」それぞれ330名を対象に実施した防災対策に関するアンケート調査では、実際に自然災害で冬の避難経験をもつ人の74%が「避難場所でお湯を必要とした」と回答。子供連れの避難者に絞ればじつに88%が「お湯が必要だった」と答えています。被災地で人はまず生きるために水と食糧を求めますが、水を温めるのにも、インスタントラーメンやカップスープを作るのにも、赤ちゃんの粉ミルクを溶くのにも温かいおしぼりで身体を拭くのにも、全て「お湯」が必須となるからです。

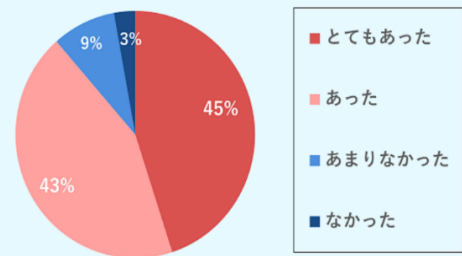
【寒い時期の避難経験者 (n=326)】

寒い時期の避難場所、お湯を必要とするタイミング
はありましたか？



【避難経験者で、子どもと避難した人 (n=140)】

寒い時期の避難場所、お湯を必要とするタイミング
はありましたか？



引用元「タイガー魔法瓶(株)調べ」

1995年冬に発生した阪神・淡路大震災では、電気復旧まで7日間、ガス復旧までは85日間を要したため、その間、多くの方がカセットボンベを使ってお湯を作りました。この時から、それまで「鍋料理」「キャンプ用品」とだけ考えられていたカセットボンベが、暮らしに不可欠の「防災用品」として再認識され、阪神・淡路を機に、それまで各社バラバラであった寸法規格もJISで統一、当時年間1億本に満たなかったカセットボンベ市場は、その後も繰り返し発生した大規模自然災害を経て、いまは1億5,000万本規模になっています。

そしてこのカセットボンベ缶には、優れた加工性と溶接性、強度、密閉性、耐食性、印刷性を備えた材料であるぶりき（スチールに錫メッキ）が使われ続けているのです。

災害が起きないに越したことはありませんが、私たちがつくる製品が世の中に求められていることに誇りと責任を感じます。



東邦金属工業株式会社